

比較文化論 : 複数の項目にまたがる研究 : 産小屋 と若者宿の相関関係

著者	大林 太良
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	011
ページ	173-178
発行年	1990-03-10
その他のタイトル	Comparative Analyses : Analyses of Combined Culture Elements : Menstruation Hut and Men's House
URL	http://doi.org/10.15021/00003661

Ⅲ. 複数の項目にまたがる研究

産小屋と若者宿の相関関係

大 林 太 良*

1. 産小屋と若者宿の分布

2. 日本との比較

本共同研究では、ワークシートを、狩猟、漁撈、家屋等々の部門に分け、かつ項目ごとに番号をつけてある。今回の諸論文は比較研究にしても原則として、家屋なら家屋という1部門内での項目間の比較である¹⁾。しかし、部門の別をこえての比較にも意義深いものがある。たとえば、産小屋(2111)と若者宿(3107)は、便宜上、別々の部門に分けられているものの、同一部門内でとりあつかっても一向不思議のないような性格の2項目である。

1. 産小屋と若者宿の分布

両者の分布を見よう(図1, 2, 表1)。産小屋と若者宿の分布図を比較し、また表を見て気づくことは、この両項目の分布が大いに食い違っていることである。つまり、両者が併存しているのは、この資料では僅か12民族であって、いずれか一方しかたぬ民族の数に比して著しく少ないのである。そしてこの分布状況を詳しくみると、両者が併存しているところは、マルク諸島からニューギニアにかけて集中しており、あとはミクロネシア(Yap), ポリネシア(Marquesas, Mangareva), メラネシア(Lau)と極めて散発的である。これに反して、産小屋はあるが若者宿のない民族は、東南ア

* 東京大学教養学部

1) 本節の諸寄稿は、本共同研究の中間段階における報告の一つ、大林太良(編)の『東南アジア・オセアニアにおける文化クラスターの構成と分析』[1985a, 1985b]に載せられた諸論文にもとづき、新しいデータにもとづいて、加筆修正あるいは拡大したものが大部分である。

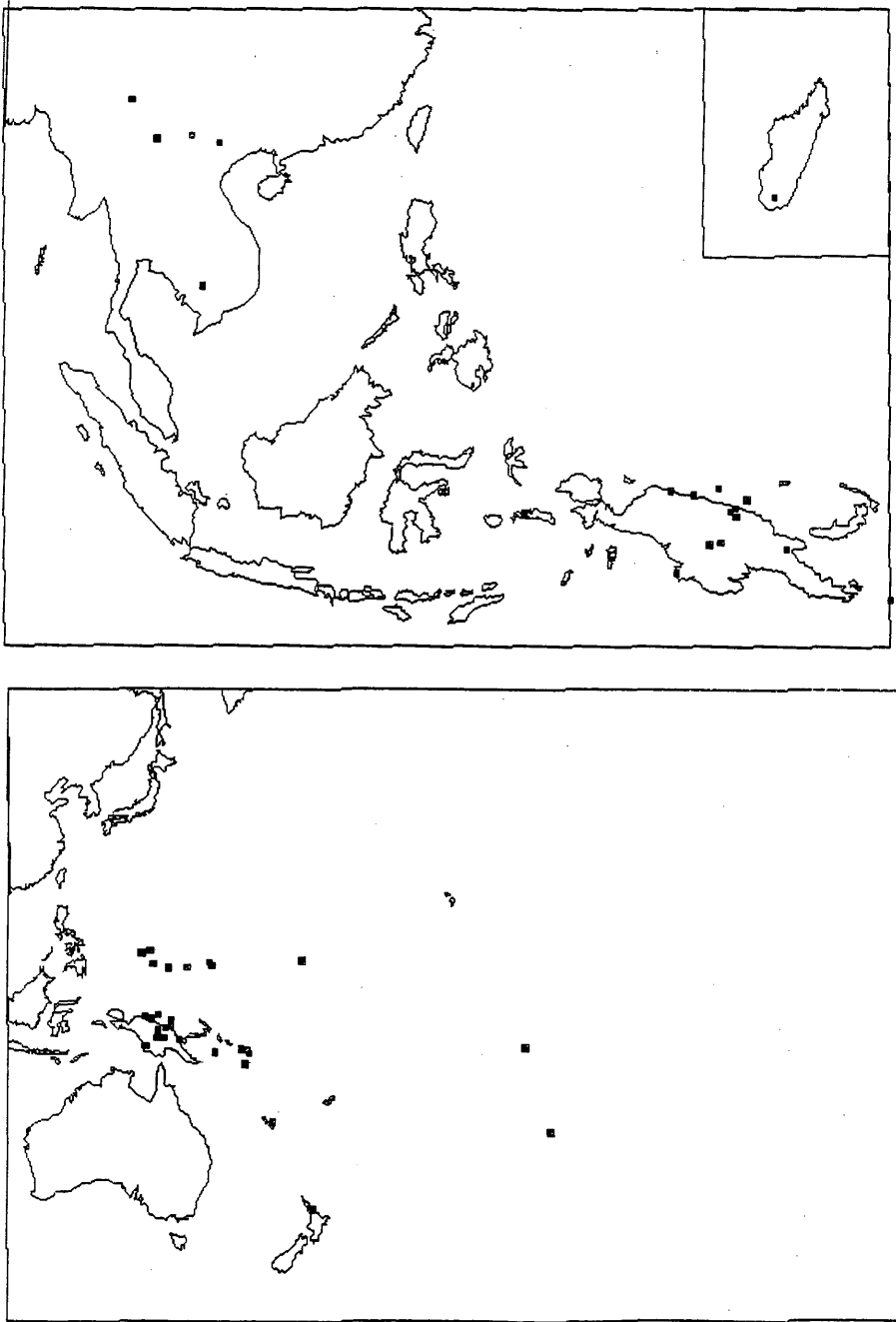


図1 産小屋 (2112) の分布

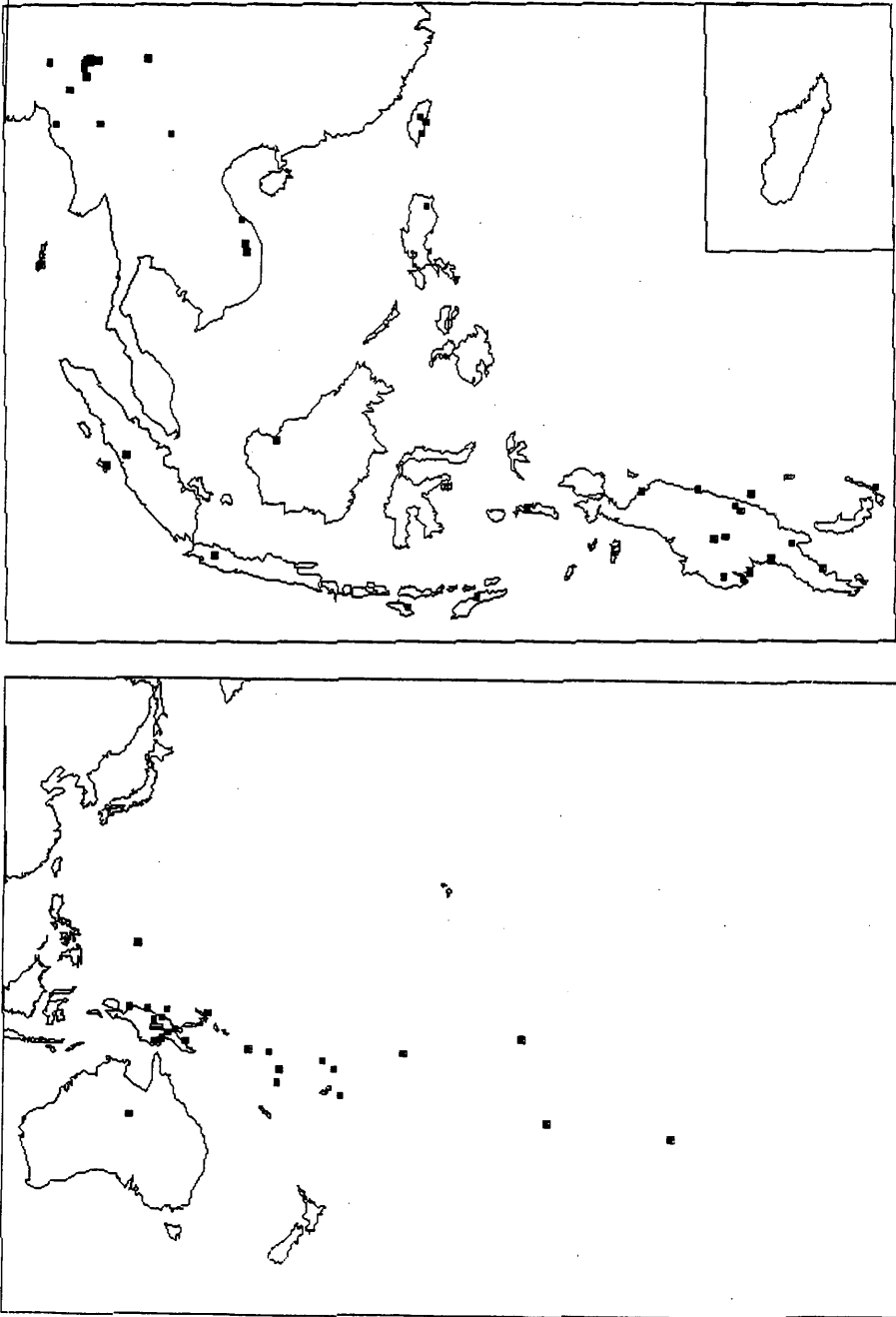


図2 若者宿 (3107) の分布

表1 産小屋 (2112) と若者宿 (3117) の比較

	若 者 宿	
	あ り	な し
産 り	Wemale, Yap, Marquesas, Sentani, Baktaman, Lau (Malaita), Seltaman, Yimar, Watut, Faiwolmin, Buna, Mangareva (12)	Antandroy, Achang, Pulang, White Tai, Muong, Cambodian, Majuro, Truk, Woleai, Satawal, Ulithi, Namoluk, Ifaluk, Maori, Kwaio, Baegu, New Caledonia, Rennell, Rossel Islanders, Kimam, Tor, Abclam, Wogeo (23)
小 屋 な し	Andamanese, Cak, Garo, Ao Naga, Angami Naga, Sema Naga, Konyak Naga, Lhota Naga, Renguma Naga, Thado-Kuki, Burmese, Lushai, Lisu, Jino, Katu, Bahnar, Jarai, Minangkabau, Mentawai, Sundanese, Land Dayak, Sumbanese, Lio, Bontok Igorot, Ami, Tsou, Puyuma, Futuna, Easter, Pukapuka, Lesu, Owa Raha, Malekula, Santa Cruz, Banks, Rotuma, Purari, Orokaiva, Kiwai, Gidra, Keraki, Waropen, Murngin (43)	

括弧内は、該当する民族数をあらわす。

アジア大陸部、ミクロネシア、メラネシア、ニューギニアに多く、また若者宿はあるが産小屋のない民族は、アッサム、インドシナの山地民、台湾、インドネシア、メラネシア島嶼部、ニューギニアに多い。つまり、両者の結びつきは、かなり地域的に親疎の偏りがあり、それぞれ別個の分布をもちつつも、ニューギニアで重なる傾向が見られるに過ぎないといってよい。このことは、若者宿と産小屋の全世界的な分布の傾向とも矛盾しない。この両項目の世界的大な適当な分布図は利用できないが、シュミット (Schmidt, W.) が挙げた若者宿の分布 [SCHMIDT und KOPPERS 1924: 244] とプロス (Ploss, H.) とバルテルス (Bartels, M.) のあげた産小屋の分布 [PLOSS und BARTELS 1913: 48-56] は大いに相違しており、両者が相伴わない大勢が考えられる。またブルームバウム (Bloombaum, M.) [1968: 329, Fig. 1] が図示 (図3) した項目には、ちょうど対応するものがなく、少しずれるが、それでも男子舎屋と女性不浄とが非常に離れて位置しているのも関連した現象とみてよい。つまり男子の結合は、かならずしも女性の隔離を伴うとは限らないのである。

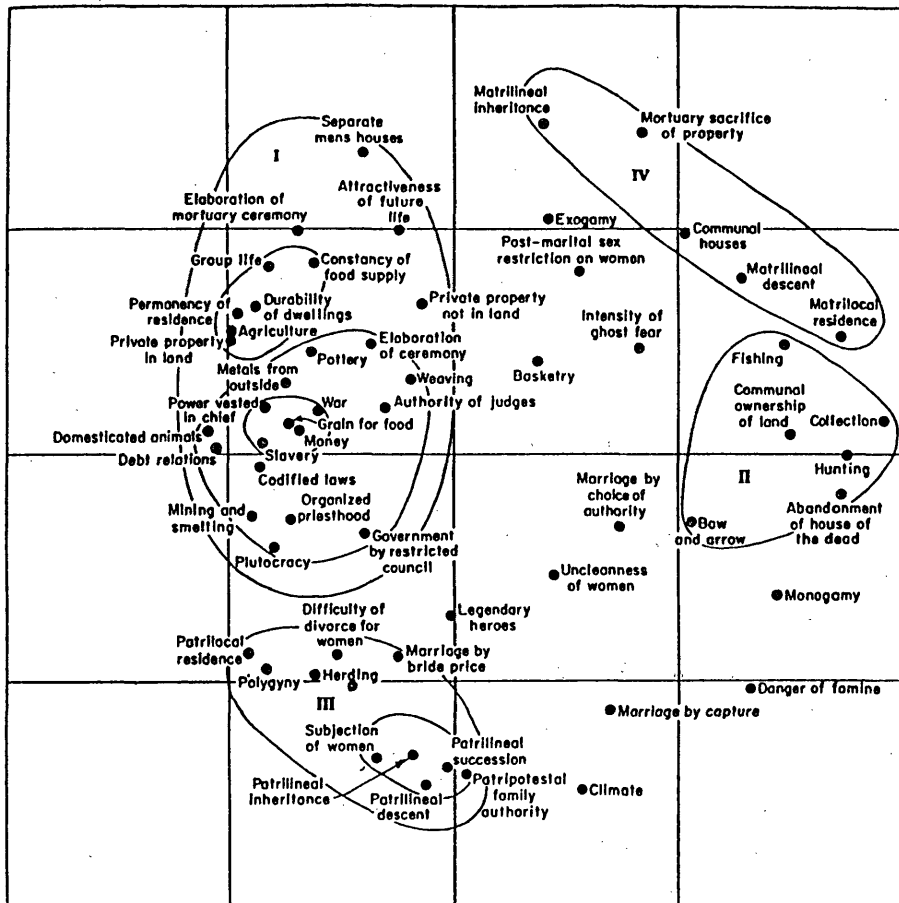


図3 最小空間法による文化要素間の関係
[BLOOMBAUM 1968, Fig. 1] による

2. 日本との比較

そして、このことは、日本の民族学者にとって、特別に興味のある問題である。というのは、すでに岡正雄その他が指摘したように産小屋と若者宿は、日本では、ことに西南部の海岸地方を中心に、大幅な分布の重なりを見せ、おそらく同一の文化複合に属することが想定されているからである。つまり、岡正雄は、日本民族文化を構成した主な種族文化複合の一つに、オーストロネシア系の「男性的、年齢階梯制的、水稻栽培—漁労民文化」を挙げ、つぎのように論じた。

「この文化のいちじるしい特徴は、分散的といってよい傾向ないし癖である。1軒

の家に2世代の複数夫婦が住むことをきらい、息子が嫁をとると親夫婦は隠居別居するか、息子夫婦が別に婚舎をもつか、いわゆる世代別居に関連する家慣習——若者宿、娘宿、寝宿、産屋、月経小屋、喪屋、これらはすべてこの文化に特有のものであったろう。成年式、成女式習俗もこの文化と深く結びついている。」

「さきに述べた屋敷内に、それぞれの機能に応じて独立の小屋を建てる文化形態は、またオーストロネシア系のミクロネシア人の文化特徴で、男子集会所、若者宿、産小屋、月経小屋、喪屋、貯蔵小屋、炊事小屋、ボート小屋、祠など分立して建てられている。これら舎屋は部分的にはポリネシア、メラネシア、ニューギニア、台湾などにも及んでいる。この種族文化は、おそらく南中国の江南地方から、紀元前4、5世紀のころ日本列島に渡来したのではないかと想像される」[岡 1979: 27-28; cf. 178-182]。

また岡は次のようにも記している。「これらの特殊舎屋が、ある何らかの文化に最初から固有のコンプレックスとして結合して存在していたものかどうか今のところ断定的なことは何もいえないが、しかし生活の諸機能や、いろいろの目的に応じて、分離、個別的にそれぞれの舎屋を設けるという、特殊な文化形態、あるいは特殊な傾向あるいは癖を有するある文化の存在は考えられるのではないだろうか」[岡 1979: 180]。

私は、ここでは議論が多岐にわたることをおそれて、岡説のうち、日本民族文化起源論には立ち入らないし、また岡が考えたほどミクロネシアでも両者の併存は著しくない点とか、産屋と若者宿以外の他の特殊舎屋の問題には立ち入らないことにする。そうしても残る大きな問題は、産屋と若者宿は、本来、相伴なうような性格のものであるかどうか、ということである。東南アジア・オセアニアの事例はこの問題にたいして否定的な解答を出しているように見える。つまり、両者は、もともと相伴なって現れるのが当然というほどの構造的ないし、機能的適合性もっていないが、他方からいうと、日本の例を見てもわかるように、両者が緊密に結びついていることも可能だから、両者は氷炭相容れないというほどの構造的ないし機能的な不適合性もっていないということである。

したがって、日本の場合のように、両者が相伴なって分布し、一つの複合体をなしているのは、むしろ歴史的理由に説明を求めべきであろう。あるいは、——これと別に矛盾しないが——日本やニューギニアの場合、産屋や若者屋以外の第3の要素Xがあって、これが媒介項となって両者の併存が可能になり、あるいは促進されているのかも知れない。いずれにしても、東南アジアからオセアニアにかけての、産屋と若者宿も分布状態は、日本の場合から類推されるような単純なものではなく、もっと複雑な問題なのである。